

敬語の成人後採用とライフステージ

Late Adoption of Honorifics and Life Stage

(Ver. 1.2)

国立国語研究所

National Institute for Japanese Language and Linguistics

日本語の大規模経年調査に関する総合的研究

Comprehensive Research

Based on Large-Scale, Long-Term Studies of Japanese

井上史雄

INOUE Fumio,

平成 26 年 6 月 27 日

27 June 2014

要旨

これまで敬語にまつわる多くの現象について、成人後採用 *late adoption* が観察された。ここではライフステージと関連付けて基本メカニズムを説明する。

「敬語を身に付けてきた機会」として、四つの主な場面が考えられる。成長に伴うライフステージの順に地域社会、家庭、学校、職場である。調査結果では、それぞれで異なった敬語要素、使用原理が習得される。少し以前の過去の日本社会の就業構造を考えると、説明できる。

岡崎敬語の経年調査による時系列データは、以上により、個人のライフステージという別の意味の時系列データと関連付けられるべきである。岡崎データについて、生年実年代によるグラフを活用して、同時出生集団 *cohort* の変化を追跡する手法をとった。音韻などのように人生初期に身につく現象と、敬語のように成人後に採用される現象との違いがきわだった。

国立国語研究所の敬語関係の報告書と文化庁の『国語に関する世論調査』を有機的に関連付けることによって、現代日本の敬語使用の実態と、その使用原理、歴史的変化を解明することができる。

さらに敬語体系の歴史的生成発展過程と結び付けることができ、人類の集団発展史の中に位置づけることも可能である。

目次

1. 本論：敬語の成人後採用とライフステージ	3
図1 解説	3
図1 敬語とライフステージ	4
成人後採用のメカニズムと性差	6
言語調査と世論調査	7
2. 補論と再掲 敬語史と人類史	8
補論1：方言と敬語の習得 世論調査	8
再掲1. 敬語のパラドックス	9
再掲2. 世界の敬語分布のピラミッド	10
補論2：ライフステージと人類史と敬語	13
参考文献	14

1. 本論：敬語の成人後採用とライフステージ

これまで敬語にまつわる多くの現象について、年齢層と使用率の関係を考察したところ、敬語の成人後採用 *late adoption* が観察された。ここではライフステージと関連付けて基本メカニズムを説明する。

文化庁『国語に関する世論調査』の「敬語を身に付けてきた機会」の問は、多くのことを語る。理論的に考えられる三つの主な場面について、国民がどう把握しているかが分かる。**家庭、学校、職場**は個人の成長過程でこの順に接する。この3場面の基盤として**地域社会**がある。調査結果では、それぞれが異なった集団（年齢、性、地方、職業）の人に影響を及ぼす。少し以前の過去の日本社会の就業構造を考えると、説明できる。

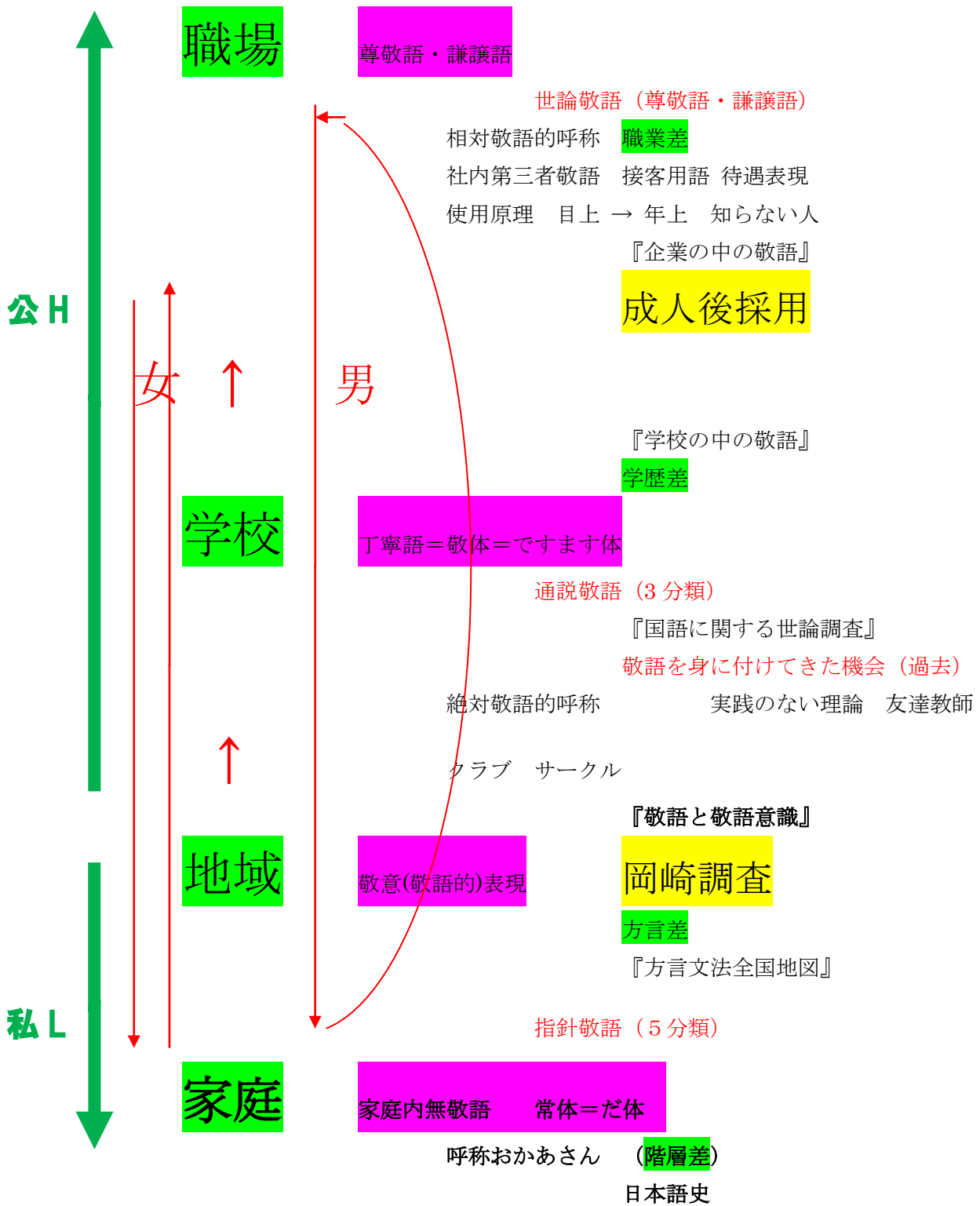
図1の説明に入る前に、「敬語」のとらえ方（分類）について、整理しておこう。文化庁世論調査や国語研の各種敬語調査によると、国民、一般人が「敬語」の実例としてとらえるのは、尊敬語と謙譲語だけである。これを「**世論敬語**」と呼ぼう。これに対し、敬語論の通説では尊敬語・謙譲語（素材敬語）と丁寧語（対者敬語）の3分類を採用し、学校教育でも敬語の入門書でも用いられている。「**通説敬語**」と呼ぼう。文化審議会(2007)『敬語の指針』では謙譲語を2分し、美化語を敬語と見なして、5分類を採用した。「**指針敬語**」と呼ぼう。敬語に関する世論調査結果を読み取るには、「世論敬語」の結果であることを意識する必要がある。一方敬語のマニュアル本の類ではもっと多様な実例が扱われていて、「敬意表現、敬語的表現」さらには「配慮表現」にあたるものも含まれる。

図1 解説

敬語とライフステージの全体像を図1に示した。個人のライフステージからいうと、下の家庭の場面から上の場面に向かう。下のほうから解説を加える。

もう一つ別の基準も持ち込もう。上が公的場面、下が私的場面で、HとL、つまり **High** と **Low** の場面に相当する。言語併存 *diglossia* 論から広がった **High** と **Low** の軸である。言語間に H と L の格差があると同様に、1言語の中にも標準語・共通語対方言との格差がある。また敬語を使う文体と使わない文体の間にも H と L の格差がある。

図1 敬語とライフステージ



1. 家庭

ライフステージから言うと、子供はまず**家庭**内で育つ。母語として身に付けることばは常体（だ体）である。現代社会では家庭内では無敬語で、目上の家族成員（父や祖父）にも敬語（国民が考える「世論敬語」の尊敬語と謙譲語）を使うことはない。小学校中学年くらいまでは、ですますを使いこなせなくとも大目に見てもらえる。家族内呼称（おかあさま、おかあさん、おかあちゃん、かあさん、かあちゃん、ママなど）の選択は家族の階層意識と関係するが、子供が使い分けるわけではない。また、よその人に向かって呼称 **address term** 「おかあさん」などでなく、名称 **reference term** 「はは」を使うようにしつけられるのは、地域差、階層差があるが、ほぼ中学生、高校生の時期である（柴田 1978、Sibata1998）。

2. 地域

少し大きくなると、**地域社会**の遊び仲間や大人に接するが、そこで敬語が（世論敬語も通説敬語も）問題になることはない。近所の店で「ください」を使えば上等である。大人に「ですます」を使わなくとも、免除される。敬語モラトリアム段階で、使えなくて当然と見なされる。昔は地域全体でこどもを見守り、ときには叱ってしつけをすることもあったが、現在はこの機能は働かず、学校に期待されることが多くなった。岡崎調査でとらえた場面は、地域社会の様々な人との接触場面である。

地域の敬語には大きな方言差が見られ、西高東低および都市化の程度と関連する（井上 2011.11）。『方言文法全国地図』によって、基本的な情報が得られる。

3. 学校

次のライフステージとして幼稚園、保育園の段階も国民に広がり、ここでは「保母ことば」（昔の「乳母ことば」の後継）とも呼ばれる「お」の多用に接する。

全員が義務教育として**学校**に入る。学校では狭義の敬語（世論敬語）は要求されない。教室場面で先生の「ですます」に接し、発言での使用が要求される。つまり敬体、丁寧語、対者敬語が要求される。ただ使用の見本に接するだけで、系統的な指導が行われるわけではない。中学に入り、そして高校で素材敬語（世論敬語）としての尊敬語・謙譲語を学ぶ。国語の授業でも学ぶし、先生との会話でも使われる。実践のない理論的説明で、『国語に関する世論調査』の質問項目によれば、実際には教室場面でも要求されない。むしろ友達教師の関係がもてはやされるようになった。また『学校の中の敬語』によっても、中学、高校では上級生にですますを使うことはあるが、尊敬語、謙譲語は使わない。しかし昔の学校では教師が（低学年に）自分を「先生が」のように呼ぶように、絶対敬語的呼称があった。教師どうしが、または父母と話すときに「〇〇先生」のように言及するのも絶対敬語的である。

高校を出たあとも半数近い若者が大学で学ぶ。学内では講義・ゼミなどという公的場面以外で教員と接する機会はそう多くない。学生は敬語モラトリアムで、誤用も大目に見てもらえる。《未知の学生にはですますで会話を始め、学年、年齢の違いが明らかになったら一方が「ため口」「タメ語」になる；親しくなると相互に「ため口」を使う》という傾向もある。親疎に応じた使い分けである。しかし学外に出れば、この年齢と場面ではまともな敬語を使いこなすことが要求される。実践としては課外活動の先輩（後輩関係）、指導者への敬語が役立つ。

4. 職場

その後**職場**というライフステージに入る。人によっては学生時代にアルバイトの形で接客用語を身に付ける。単純化され、定型化された、「マニュアル敬語、バイト敬語、ファミコン敬語」などと言われるもので、従来使われなかった表現が混じるために、識者の非難を浴びる。

正社員として就職すると、会社内と社外とで、上下関係をわきまえたまっとうな敬語が要求される。社内の職階の上下関係をわきまえ、話題に出た人物について相対敬語の立場から適切な表現をたちどころに使いわけるのは、かなり難しい。運動部やバイト先で覚えた敬語が役立つ。なお職場の敬語のうちの接客用語は、地域社会での商店の接客用語として児童が接するものと同じである。敬語使用原理に変化のきざしが見え、「目上」という基準から単なる「年上」または「知らない人」という基準が広がりつつある。

『企業の中の敬語』によれば、職階に応じた見事なことばの使い分けが観察される。文化庁『国語に関する世論調査』によれば、職種によって敬語の使用能力や敬語意識に違いがあり、ホワイトカラーほど高い能力を持つ。またマニュアルや講習会で意図的に身に付ける機会も多い。

敬語使用原理としては、昔は「目上」で良かった。江戸時代までさかのぼれば、階級（武家と町人）などの差別が大きく、非相互的、一方向的な敬語使用が行われていた。外見からも階級の判断できたので、問題は少なかった。近代以降「封建的」な考え方が排除され、ことに戦後、民主化平等化が進んだ。年上の上司、転職のための入社年からいうと後輩の年長者などが生じた。職階と年齢が矛盾するときに無難な方策は、年齢重視である。目上という基準が利きにくくなった。同様に知らない人には失礼のない表現として敬語を使うことにより「知らない人」という基準が浮上した。拡大すると西欧で観察された上下関係 *power* から親疎関係（左右関係） *solidarity* への変化の先端が観察される。

前述のように、学校という職場の教師間でお互いに「先生」と呼び合い、外部の人と話すときにも「○○先生」と言及するのは、近世までの絶対敬語的な用法である。病院の医師も同様である。ふつうの会社に普及した近代東日本の第3者敬語と原理が違う。

いずれにせよ、人々が「世論敬語」としてとらえる尊敬語や謙譲語を実際に使いこなす必要があるのは、職場においてである。その前の学校（大学）段階は、敬語モラトリアムと考えていい。敬語の変化に関する諸調査で、敬語の「成人後採用」が観察されるのは、このライフステージによって説明される。

成人後採用のメカニズムと性差

世論調査の結果で、**成人後採用**が敬語で際立つのは以上のためである。社会人として、職場で、はじめてまともな敬語「世論敬語」が要求されるので、採用、習得、獲得が遅れる。敬語にまつわる社会言語学的能力（待遇表現、敬意表現、ポライトネス）も同様に成人後採用を示す。

以上には性差がからむ。男性は終身雇用が盛んだったときには定年まで勤めた。職階に応じた敬語を使った。定年後は家庭に戻り、地域社会に復帰して、地域社会の（上下関係のゆるやかな）敬語を使う。

女性のライフステージは少し前までの日本社会では違っていた。敬語の使用原理も違う点があった。女性の就職期間は短く、「結婚退職」が多かった。図1で示したように、女性は家庭から地域、学校に社会的場面を広げた後、短期間職場にあって、ふさわしい敬語を身に付けた。多くは目下としての敬語である。その後女性の社会進出にともない、女性の上司、女性の経営者が登場し、部下の男性へのことばづかいが問題になり、興味を引いた時期があった。今は男女雇用機会均等法の影響もあり、女性の上司はありふれている。現代は子育て期間に退職してそのあと復帰するために「M字雇用」が増えた。勤め続ける女性も増えたので、職場の女性の敬語は、研究対象にはなっても、特殊なものとは位置づけられない。

言語調査と世論調査

以上4個の場面に分けて、ライフステージと関連づけて説明した。敬語の実地調査に基づく研究書と結びつけよう。文化庁の『国語に関する世論調査』は敬語について多様な問を含むが、大部分が都会の職場に関わるもので、一部学校の敬語や家庭や地域社会の敬語について調査しているだけである。その先駆としてNHK放送文化研究所の言語環境調査や総務庁の『国語に関する世論調査』がある。国語研の調査項目にも世論調査的な意識、社会心理項目が含まれている。ワーディングが異なるなど、相互の直接比較は用心すべきである(Inoue 2008)。しかし経年調査の形をとると、それぞれの調査の内部での動向に着目して全体的傾向を見ることになるので、相互比較が可能になる。例えば日本語の乱れ意識が国民の間に広がったと思われるが、それは各種の世論調査を集成して証明できる。

家庭については、大規模な調査は思いあたらない。個別には家庭内の呼称、夫婦間・親子間の敬語についての研究がある。アンケートやシナリオなどによる分析である。家庭内の敬語については、最初に習得の行われる場として今後の研究が期待される。しかし尊敬語、謙譲語が使われなくなったので、面白みが薄れ、呼称などに絞るしかない。

地域の敬語については、国立国語研の岡崎の調査『敬語と敬語意識』の経年調査が重要な位置を示す。京都についての対照調査もある(井之口・堀井 1972)。地域社会を位置づけるためには『方言文法全国地図』が基礎資料となる。ただ地理的平面の分布を主眼にしているため、場面差などについては、数枚の地図を対比する(または総合図を作る)などの手間が必要である。1地点の状況を知るには、岡崎調査が重要な位置を占める。その項目の中に、地域社会の成員どうしの(以下の学校や企業の中の調査で見逃される)項目が入っているからである。国語研の岡崎調査は、大規模経年調査の一部として、地理的に全国3か所(鶴岡、岡崎、富良野)の中に位置づけられている。ことばの定点観測計画の候補地だが、ライフステージから言うと、地域、家庭、学校、職場の中に位置づけられる。それぞれの報告書を相互に関連づけるにも役立つ。また『社会変化と敬語行動の標準』が役立つ。

なお『国語に関する世論調査』の「敬語を身に付けてきた機会」で、地域と関わりそうな選択肢は「話し方教室や作法教室、自治体や民間の講習会など」だが、最下位である。地域社会の自然習得の場面は選択肢にない。あったとしても現代日本では近所の年長者や友人などが敬語について注意してくれることは考えられない。ただし地元の商店に就職した人が周囲の敬語を真似ながら身に付ける事態は考えられる(報告もある)。しかし敬語に関して地域社会の果たす役割は現在は小さくなったと判断される。国語研の岡崎調査でもうかがえる。

学校については国立国語研の『学校の中の敬語』がある。国語研の調査・分析の主眼は、これまで執筆者の関心の置きどころのせいもあって、言語的な事項に置かれていた。幸いなことに言語項目もNHKや文化庁の世論調査で扱われており、たとえ同一項目、同一手法でなくとも、また1回だけの調査でも、相互に関連付けることは可能である。全国レベルの大規模経年調査と扱っていい。

職場については国立国語研の『企業の中の敬語』がある。典型的な大企業の内部の敬語使用が数値で確認できる。職場の敬語については、談話資料による研究もある。『国語に関する世論調査』の項目のかなりは大都市の企業などの敬語使用に関わるもので、全国の地域差、職業差などを知るにも役立つ。また建前としての敬語、敬意表現については、多くのマニュアル本、入門書、実用書が役立つ。

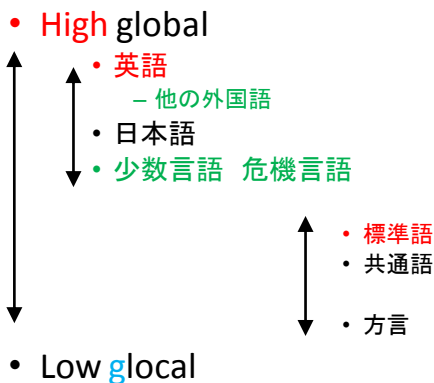
2. 補論と再掲 敬語史と人類史

補論1： 方言と敬語の習得 世論調査

以上ライフステージと関連づけて説明したが、敬語は実は方言と深い関係にある（井上 2011.11）。母語として身につける「地域社会」のことばは、多くの場合方言である。方言は共通語化により、急速に消滅しようとしているが、他方、今なお新方言が生まれて若い人に使われるし、また場面によって方言と共通語が使い分けられる。しかし前述のように、学校（の授業）では共通語が使用され、同時にデスマス体が使われる。方言の世論敬語（尊敬語、謙譲語）は学校という集団では習得の機会がない。児童生徒学生が家に帰れば地域社会の大人の成員に接する機会が生じるが、これまでの対話場面調査によれば、敬語の要求されるような目上の人と接する機会は少ない。学校を卒業して、地域社会の成員の一人（例：地元の商店主）となったときに、本格的な敬語を使う（採用する）必要が出る。しかしその場面は同時に共通語がふさわしい場面でもありうるので、共通語敬語が採用されることになる。このようなライフステージ事情が背後にあるので、岡崎でも方言敬語はすたれる一方である（辻 2014）。

言語併存 diglossia 論から広がった High と Low の軸について、**図 2** を使って、説明しよう。

図 2 言語の格差 High Low



ことばとライフステージとの関係を単純化して言うと、成長に従ってLのことばからHのことばを習得する過程である。幼いときにLのことばとしての方言を身につけ、学校でHのことばとしての標準語・共通語を習得する。またHに位置づけられるデスマス体（敬体）を使うようになる。卒業後職場に入ると、Hとしての尊敬語、謙譲語も使いこなす。なお学校において重視される技能の一つに外国語がある。既成の教育システムでは英語になっており、つまりは日本語よりHに位置づけられる言語を身につける。社会化のプロセスとして、言語面ではHのことばを身につけるのだが、個人としては、身につけることばの順番を無意識のうちにHとLの軸に位置づける。その個人の意識の集成が社会意識、知識としての言語格差を構成する。かつて言語相対論について述べたと同じ循環過程を考えることができる（井上

2011.11)。

以上の視点を入れると、これまでの言語調査は視野が狭かったと言える。方言の調査と敬語の調査は、理論的接合が不十分だった。日本語と外国語の接触についても、外来語の使用と意識の調査を行っても英語の使用と意識（学歴または英語の成績）と結び付けることが（個人の成長過程についても国家の政策や教育法についても）少なかった。差別、格差と結び付くために、「客観性」を尊ぶ研究者が無意識のうちに回避していた研究テーマ、問題意識だった。

さらに、普通の世論調査では10代後半（または20代）からが対象で、児童生徒の状況がつかめない。学校経由で行う調査では、地域や家庭の状況がつかみにくい。さらに幼児や小学生のことばに関する調査は、小規模なものになりがちで、ライフステージのあとで問題になる現象が分かりにくい。例えば小学生の敬語はほとんど使われていないという予測があるので、わざわざ調査されることも最近までは少なかった。

岡崎敬語調査の結果は、これまでの国語研の報告書のように、単独の自律的な体系を持つものとして記述されるべきだが、一方で方言と結び付ける必要がある（辻 2014）。またライフステージの関係から、学校や職場の敬語と関連付けた記述が必要である。

この観点から言うと、『学校の中に敬語』で山形県も対照として組み入れたのは成功だった。デスマス体の使用について、男女差が際立った点は、上記の観点からいうと重要である。学年が上の人をセンパイと呼ぶか、デスマス体（敬体）を使うかで、山形県の女子生徒は東京、大阪と似るが、男子生徒は違う。センパイと呼ぶことが少ないし、デスマス体（敬体）もあまり使わない。隣接都市鶴岡市で1950年代を生徒として過ごした井上史雄の体圏と一致する。女子生徒が東京都おなじなになったのは、共通語化が急速に進展し、女性だけにいち早く取り入れられたと、説明できる。従来女性には目上目下にもとづく厳格な敬語使用は要求されず、女性は親疎関係を重視する、という理解があったが、それに矛盾する。共通語化なら納得がいく。これは生徒の方言使用とも関連付けられるべきである。

以上のような広いかつ多様な視点視野のもとに、岡崎敬語調査は位置づけられる。総合的包括的なまとめが要求される。

以下には井上 2009 の関係部分をコピーして再掲する。成人後採用の基本メカニズムを説明した部分である。

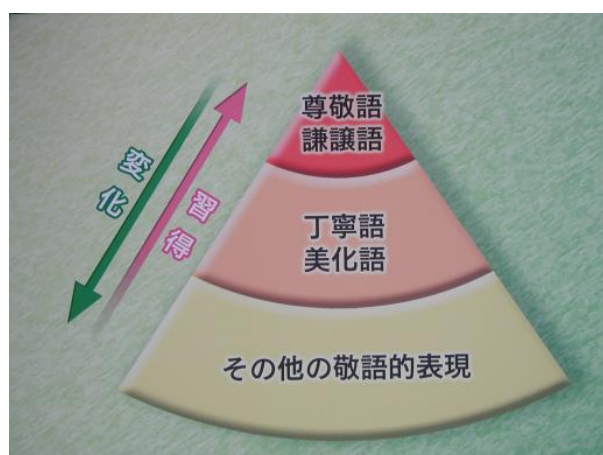
再掲 1. 敬語のパラドックス

まず基本として、敬語習得が共通語化の頂点にあることを確認しておきたい。これまでの共通語化調査、方言調査の分析によると、社会的活躍層（柴田 1978）、ひいては高学歴のホワイトカラー層が共通語使用のピークをなすことがあった。この層が実際に共通語の使用に迫られることが日常的に多いことを反映する。また帰属社会階層意識、ひいては教養・しつけが、敬語使用の上手さをかきたてるとも説明できる。共通語の最高の使用者は、さらに敬語の使いこなしが要求されるわけである。つまり、敬語使用は個人の経済条件（所得・財産）と直接には関連しない。

敬語の言語年齢学的パラドックス

敬語使用の年齢差に関して、もう一つ、社会人としての言語習得の遅れ、つまりは敬語モラトリアム世代としての大学生についても考える必要がある。敬語変化と習得のパラドックスともいべきもので、世論調査などの年齢差をもとに、若い世代の敬語がそのまま将来の敬語変化に結びつくとはいえないことになる。言語変化をみるために年齢差という見かけの時間の相対年代を利用する際の危険さを意味する。岡崎（国立国語研 1983）、鶴岡（国立国語研 2007）、その郊外山添（井上 2005.12a）などで、また文化庁などの世論調査で、10代にある傾向が現れても、将来の敬語変化を指し示すものでなく、単に従来の敬語の未習得を示す可能性がある。つまり理論的保留として、敬語の習得年齢が現象によっては遅いことを考慮する必要がある。（ただし言語現象によって、使用のピーク・習得時期に違いがある。第 22 章の成人後習得の議論は、音韻の幼児期の習得、新方言の若年層での習得を、否定するものではない。）

図 21-1 敬語習得と変化の逆向

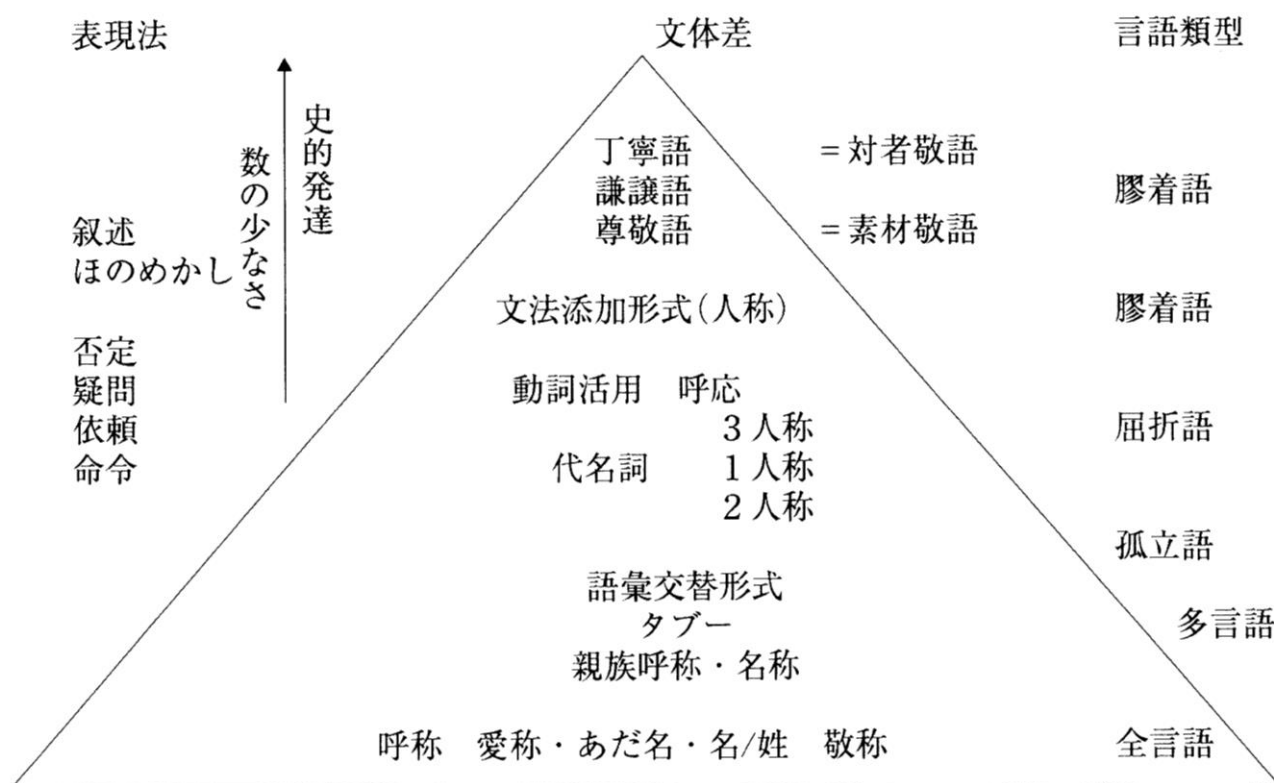


習得と変化の逆向関係を、**図 21-1** の円錐の左の二本の矢印で示した。敬語の典型ともいえる尊敬語・謙譲語（素材敬語）は、歴史的には古代から使われており、丁寧語（対者敬語）はほぼ中世以降の発達である。しかし個人の言語習得の順番からいうと、丁寧語は学齢期以前にも身につくが、尊敬語・謙譲語は大学生世代または社会人として身につくことがあり、ことに第三者への「正しい」とされる敬語は、もっとあとで身につく。大学生までは敬語使用から免除されている（社会人としてはじめてまともな敬語が要求される）という「敬語モラトリアム」が典型である。方言の話し手における共通語習得の遅れとも共通で、社会言語学でいう年齢階梯 *age grading* の典型ともいえる。これは日本語の難易度（難しさ）の指標ともなる（井上 2001.8）。

習得初期の具体例としては、第 3 節の、自分の家族に言及するときの「母」という表現の使用（都市部では高校生程度）が典型である（Sibata 1998）。つまり年齢差の反映するものは、言語変化と限らないのである。

再掲 2. 世界の敬語分布のピラミッド

図 19-1 世界の敬語のピラミッド



2.2. 言語内の要因：言語類型

敬語発達の要因は言語内、言語外に分けられる。まず**言語内**の要因として、経済言語学的条件が働く(井上 1989.10)。

図 19-1 の右端に、言語類型について、膠着語・屈折語・孤立語、そして多言語と書いてある。類型論からいうと、膠着語は、日本語やトルコ語、モンゴル語などを指す。屈折語は、ヨーロッパの諸言語で、例えばドイツ語、ロシア語、ラテン語やギリシャ語のように、動詞の活用や名詞の格変化が複雑な言語である。孤立語は中国語が典型とされているもので、文法的な活用がないものである。その下の多言語はいろいろな言語にあるという意味である。

言語 4 類型の一つとしての膠着語に属する諸言語では、個々の言語要素（助動詞や助詞などの接辞）に個別の文法機能があるので、敬語形を経済的に作れる。日本語のような膠着語は、敬語を作りやすい。敬語の要素の助動詞を作ってしまうと、その助動詞はほぼすべての動詞に規則的に付けられる。「られる」という敬語の助動詞を自由に付けうる。それから助動詞でなくても、「お〜」「お〜なさる」とかの類を動詞に付けることができる。敬語のための特別のことばを作り、そのことばはほぼすべてに付けられるという便利さがある。

これに対し屈折語では敬語を作りにくい。ラテン語で敬語の要素を作ろうと思ったら、「愛する」という動詞の活用形で *amo, amabis* … などがあるが、その活用形の中の母音を一つ変えて子音を一つ付けて敬語になる、となったら大変だろう。それを 1 人称・2 人称・3 人称の、単数・複数での 6 種類作って

覚える必要がある。現在形以外の過去形に作ると、格変化を 6 の数倍と、ずいぶんたくさん覚えなくてはいけないので、不可能に近い。ドイツ語もそれと同じような屈折語的性格を持っていたのだが、ドイツ語とか英語は、might などの助動詞を後に発達させたので、日本語と少し似たような、膠着語的な形の敬語表現が一応可能になったのだ。

言語によっては、「もし何とかだったら」、「もしわたしが鳥だったら、飛べるだろう」とかの、英語での仮定法やドイツ語での条件法を使った。「もしこんなふうにしていただけたら、わたしはうれしいのですが」と、言ったりする。英語でもドイツ語でも、そんな言い方をすると少し丁寧に響く。それは形として日本語の助動詞を発達させたものと似ている。助動詞の「れる」、「られる」、補助動詞の「なさる」を発達させたのと同じように、以前からあった仮定法・条件法を使っているのだ。そういうことから考えると、日本語はピラミッドのトップに位置する。助動詞を持っているおかげで、丁寧語の助動詞、謙讓語の助動詞、尊敬語の助動詞を作ることができるのだ。屈折語だと動詞の活用を使う。ピラミッドの中間あたりに位置することになる。

印欧語などの屈折語類型やインディアン諸語などのような抱合（複総合）語類型では、敬語要素を独立させにくい。印欧語などで、仮定法・条件法などを転用して敬語的に使うのは、文法的経済のためである。また 2 人称代名詞の使い分けも発達させた。もし敬語専用の活用形を作ると（人称と数による）活用暗記項目が増えるだろう。

これに対し中国語のような孤立語では、文法的な敬語形を作るのは困難で、個々の語に「御、玉、龍、麗」などの要素を付ける必要がある。

以上のように、世界の諸言語の敬語に関わるさまざまな表現を整理すると、階層関係をなすととらえることができ、**図 19-1** のようにピラミッドの形でも示しうる。敬語の**含意規則** implicational rule を指摘できる。つまりピラミッドの上のほうの現象を持つ言語は下のほうの現象も持つといえる。以下に例示しよう。

日本語に見られる対者敬語（丁寧語）は、素材敬語（尊敬語・謙讓語）の用法変化として現れた。つまり対者敬語のある言語には素材敬語があり、地域限定的で、敬語のピラミッドの頂点近くに位置づけられる。また素材敬語つまり話題敬語のある言語は東アジア特有の傾向があり、その言語には代名詞の敬語的使い分けがある。代名詞使い分けは 3 種か、2 種か、3 人称にもあるか、2 人称にもあるかの順で、言語数が増える。代名詞の使い分けのある言語には親族呼称などの使い分けがある。人名に関する愛称や敬称回避の現象やポライトネスに関わる諸現象は、多くの言語に分布する。以上が含意規則である。

以上言語内の条件について考えた。このピラミッドの背景には、言語類型がある。また各言語を担う社会の階層分化の程度がある。

2.3 言語外の要因：社会階層分化

敬語発達の**言語外**の要因としては、社会の階層分化が関係し、背景には経済発展がある。歴史的にも地理的にも王侯貴族の発生が敬語の発達に結びつくことが多い。2 人称代名詞の敬語の世界分布地図（Helmbrecht 2001、**図 19-2**）で、（王制、帝国、封建制などを経験した）欧米やアジアに敬語的区別のある言語が分布し、（部族社会が主体だった）アフリカや南北アメリカにあまり分布しないのが示唆的である。

日本国内でも、大きくみると経済発展と敬語が関連し、関係が見られる。加藤（1973）以来の敬語の地理的分布は『方言文法全国地図』GAJ（国立国語研 1989～2006）によって再検討すべきだが、これまでに取り上げられた二重の圏論ともいうべき大きな分布傾向は、有効である。一つは国土全体についての「敬語の西高東低」で（井上 2008.5a）、敬語使用が西日本諸方言（ことに京都付近）で発達していて、東日本諸方言（ことに北関東と東北地方）で未発達な状況である（図 18-1）。もう一つはもっと狭い地域差で、（古くからの）都市化の影響として、江戸時代の城下町などには敬語が発達していて、周囲の農山村では敬語を使わない、という傾向である。

第 18 章で日本の敬語の方言差を、社会経済的發展、さらには階層分解と結び付けて説明したが、世界の敬語の言語差についても同様の説明ができる。

以上再掲

補論 2： ライフステージと人類史と敬語

以上の再掲部分で、世界の諸言語の發展段階をピラミッドとしてとらえた。下から上への發展としてとらえると、いわゆる「文法化」と同一方向とも解釈できる。実質的意味を持つ語形が文法形式に化するという過程が見られる。日本語敬語史についての辻村（1968）の業績を再評価すべきである。

ただし、図 19-1 で丁寧語＝対者敬語の成立を、世界の敬語ピラミッドの最上位においたが、別の考えもありうる。対話の場面の改まりに関連する現象と考えると、ピラミッドの下方への転進とも位置付けうる。文法化が進んで、実質的意味を失い、文法的機能をさらに少なくする変化である。

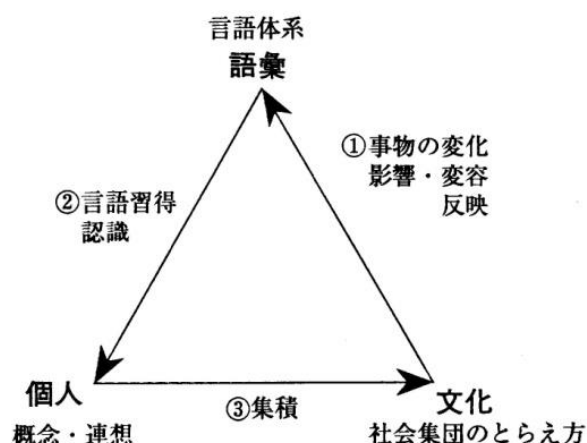
さらに人類史と社会集団形成の中に敬語を位置づけることもできる。以下に表の形で示す。

血縁集団	家族	氏族	親族（マキ）	家族	世代呼称と固有名詞の方向性
地縁集団	ムラ	年齢階梯制	（遊び仲間 若者組）	地域	長上 目上
職業集団	職業	分業の成立		職場	師匠と弟子
階層集団	士農工商	不平等敬語			階層差

図 1 でいうと、これらの集団は家族の上方に発達した。近代になって学校が家庭と職場の間に介入した。学校の歴史的成立からいうと、貴族、武士のための文献による教養のための機関ができ、のちに寺子屋の形で読み書きの教育が行われ、近代の学校の成立につながった。その後職業への準備教育から、高学歴化が進んだ。また家庭の役割を委託する変化が進んだ。家族機能の分解、労働時間の延長、共働き増加などの事情が背景にある。

つまり現代の敬語のあり方は、各種社会集団の機能展開に左右されている。かつて言語相対性理論、Sapir-Whorf 仮説の妥当性を図化して論じた（井上 2000.2: p.159, 井上 2011.12: p.271）。図 3 として再掲する。敬語についても、言語外の要因の支配を認めることができる。

図3 言語と社会の規定3角形



参考文献

- Inoue, Fumio (2008) "Population ageing and language change". Coulmas, F. et al. *The Demographic Challenge: Handbook about Japan* (Lijden) pp.473-490.
- 井上史雄(2011.11)『経済言語学論考——言語・方言・敬語の値打ち——』明治書院
- 井之口有一・堀井令以知(1972)『京都語位相の調査研究』(東京堂出版)
- 国立国語研究所(1958)『敬語と敬語意識』(秀英出版)。
- 国立国語研究所(1982)『企業の中の敬語』(三省堂)
- 国立国語研究所(1983)『敬語と敬語意識 — 岡崎における20年前との比較—』(三省堂)。
- 国立国語研究所(1986)『社会変化と敬語行動の標準』(秀英出版)
- 国立国語研究所(2002)『学校の中の敬語1—アンケート調査編—』三省堂
- 国立国語研究所(2003)『学校の中の敬語2—面接調査編—』三省堂
- 国立国語研究所(2010)『敬語と敬語意識—愛知県岡崎市における第三次調査—』科学研究費補助金研究成果報告書 第1~4分冊。
- 柴田武(1978)『社会言語学の課題』(三省堂)
- Sibata, Takesi (1998) *Sociolinguistics in Japanese Contexts*. Edited by Tetsuya Kunihiro, Fumio Inoue & Daniel Long (Mouton de Gruyter) (Partly accessible through Google Books)
- 辻加代子(2014)「岡崎市方言敬語伝統形式および新形式ミエルの消長—継続サンプルの分析より—」『国立国語研究所論集』第7号 pp.265-287
- 辻村敏樹(1968)『敬語の史的研究』(東京堂)
- 文化審議会(2007)『敬語の指針(PDF)』www.bunka.go.jp/1kokugo/pdf/keigo_tousin.pdf
- 文化庁国語課(1996)『国語に関する世論調査(平成7年4月調査)』(大蔵省印刷局)
- (途中省略)
- 文化庁国語課(2013)『平成24年度国語に関する世論調査(平成25年3月調査)』(国立印刷局)

大規模経年調査資料集 6

Material for Large-Scale, Long-Term Studies of Japanese

敬語の成人後採用とライフステージ

Late Adoption of Honorifics and Life Stage

(Ver. 1.2)

日本語の大規模経年調査に関する総合的研究

Comprehensive Research

Based on Large-Scale, Long-Term Studies of Japanese

著： 井上史雄

INOUE Fumio

発行：平成 26 年 6 月 27 日 27 June 2014

国立国語研究所

National Institute for Japanese Language and Linguistics

〒190-8561 東京都立川市緑町 10-2 Tel. 042-540-4300 (代)

10-2 Midori-cho, Tachikawa City, Japan 190-8561